

徳富蘇峰記念館

目録

(13)

徳富蘇峰と『近世日本国民史』

展示期間◇平成八年一月五日～十二月二十日

はじめに

今年の展示は蘇峰の修史『近世日本国民史』をテーマとした。なぜこれをテーマにしたかは、昨年春当館が出版した『徳富蘇峰宛書簡目録』の編集の過程で、多くの人々が、いかに『近世日本国民史』を愛読していたかを肌で感じ、蘇峰を知るには、蘇峰が心血を注いだ修史を知らなければならぬと痛感したからである。

徳富蘇峰（一八六三—一九五七）といえば主に、1明治二十年、民友社を創設、二十一年『国民之友』、二十三年『国民新聞』を創刊し、清新な言論で平民主義、反藩閥政治を唱えた明治の青年として、2明治三十年、松方内閣の内務省勅任参事官に就任し、変節漢として轟々の非難をあげた者として、3日露戦争講和問題で、御用新聞と言われながらもポーツマス条約に賛成し、焼き討ちに会った国民新聞社の主幹として、4昭和二十年、敗戦とともにA級戦犯容疑者となった戦争責任者として、5『近世日

本国民史』百巻を著述した者として知られている感がある。

しかし四万六千通の書簡から描かれる蘇峰像にとつて、これらの蘇峰は、全体像の一部であるように感じられてきた。文久三年から昭和三十三年まで、九十五年を歩んだ蘇峰の生涯には、まだ知られていない面が沢山あるように思える。その研究の窓口ともなるものが、『近世日本国民史』ではなからうか。蘇峰五十六才から九十才までの三十五年をかけて（実際は昭和二十年十月から二十六年十月まで六年間の中断あり）全力投球で書いた修史の百巻を全部通読した人は現在では少ないであろう。『近世日本国民史』がどんなものなのか、実物に触れた人も意外に少ないであろう。大正七年六月三日に書き初められた国民史は、まず『国民新聞』に連載され、全国的に読者を得、ルビのほどこされていた『国民新聞』の文章は厚い層の読者を獲得した。連載の後は素早く単行本として刊行され、多くの人は新聞と単行本とで二回読んでいたようである。

『近世日本国民史』百巻のうち、蘇峰が生きているうちに出版されたのは七十六巻までで、全百巻が出版されたのは昭和三十八年八月、平泉澄校訂により時事通信社からである。蘇峰の死後六年、脱稿から十一年がたった。次いで昭和五十四年三月から講談社学術文庫から復刻されはじめ、現在までに四十九冊が刊行されている。

当館には民友社から出版された上製本六十一巻（全七十六巻のうち）を所蔵している。天金の立派な装丁で、巻頭には信長、秀吉、家康、大坂城、江戸城、大石蔵助の細川邸での切腹の場面、近松門左衛門、新井白石、林子平、彼理（ペリー）提督国書呈進之図、吉田松陰、開港初期横浜図、和宮様御参向御行列図、桂小五郎、坂本龍馬、岩倉具視幽居の図、徳川慶喜など、人物像や歴史的場面の挿し絵（所蔵の博物館名が明記されている）が掲載されている。これら六十一巻を展示したところ、興味深い絵巻になった。時事通信社出版のものには巻頭の挿し絵はない。また『近世日本国民史』の百巻の題名を並べて見ただけでも、歴史の節目が見えてくるようである。百冊という量の膨大さにも圧倒される。なによりも驚かされることは、一冊ごとに時代年表、人物概覧、索引が付いていて、史料として使

う者に大変親切な構成であることである。たとえば一卷『織田氏時代 前編』の人物概覧には五百六十五人が登場している。全百巻では合計約一万八千人が登場する。詳しくは題名、出版年、出版社などと共に「近世日本国民史年表」にまとめた。蘇峰の書簡を読む時の背景として、又社会的活動の背景としても参考になりそうである。

『近世日本国民史』に関しては蘇峰自身が多くを語っている。たとえば『歴史の興味』(S5 民友社)『卓上小話』(S6 民友社)『修史余課』(S6 民友社)『大事小事』(S7 民友社)『読書九十年』(S27 講談社)『三代人物史』(S46 読売新聞社)など数かぎりない。最近出版された杉原志啓氏の『蘇峰と近世日本国民史』(H7 都市出版)によって、蘇峰の修史事業の総合的研究が紹介されている。

『近世日本国民史』について

一、執筆の動機 (蘇峰の「修史述懐」 国民史一卷の序文より)

文章報国が天職と考えていた蘇峰は、明治天皇の亡くなったとき、「明治天皇御宇史」の著述を思い立った。その修史(歴史を編修する)の理由と動機は

- 1、明治天皇の偉業と天皇を助けた維新の元勳、明治の良臣、指導者、発展した国民などの幾多の人物を後世に伝える必要を感じた。
- 2、蘇峰は明治元年に六才であったので、明治天皇の御代の初期から終期まで見つけることができた。明治二十年以後は国政の付近に働く機会もあり、明治天皇のことを伝えるのは当然の任務と考えた。
- 3、維新史において西郷、木戸、大久保の三傑同様の働きをした勝海舟に親しく教え受け、維新に活躍した人の抱負、経緯、人品などが得

していたのでそれを書きたかった。

二、期間時代分布 (「修史述懐」より)

「明治天皇御宇史」を書くには、すぐ前の「孝明天皇御宇史」を、更に徳川時代史、更に織田・豊臣時代を無視することはできないと、時代背景を辿つていき、信長時代から書くことにした。蘇峰は織田時代を日本の近世の幕明けと考えた。歴史は際限なく不断のものであるが、皇室を中心とし、国家を統一し、その統一した勢力を世界に發揮する明治中興の帝王の道の淵源は、織田、豊臣時代であるとした。維新三傑活動の天地を描く序幕として信長、秀吉、家康の時代を書くのは、いささか縁遠いようだが、これはやむ終えないと、好きな信長から書き始めた。そして全体の修史の事業を三期にわけた。

一期 織田豊臣時代より徳川時代

二期 孝明天皇時代

三期 明治天皇時代

織田から、明治十年西南戦争までの約三百年の修史は、十年計画で書き始められたが、実際には三十五年の長きに亘った。明治時代が西南の役迄しか扱えなかったが、その直接の背景となる孝明天皇の時代二十年間に關して三十三冊、明治天皇の時代の初期十年間に三十八冊をついやしていることから、明治維新と明治天皇の業を書きたかった蘇峰の本意を理解することができる。蘇峰自身「明治十一年以降、天皇崩御に至るまでの間に於ける、重なる事件の綱領だけを記して、予自ら不満足ながらも其局を結ばんことを期している」と「百巻の述懐」に書いている。修史の完成を後賢に期すると言いながらも、蘇峰の意欲は衰えず、『近世日本国民史』を脱稿した二年後には、読売新聞社長正力松太郎の力を借りて発表の場を得、『三代人物史』を読売新聞紙上に掲載し始めた(昭和二十九年三月七日から、三十一年六月十日まで週一回)。晩年蘇峰は塩崎に中国の歴史も書いてみたいと語っている。歴史への情熱は永眠するまで燃え続けていたようである。

三、帝国学士院より恩賜賞が授与される

大正十二年五月、『近世日本国民史』のうち、『織田氏時代』三冊、『豊臣氏時代』七冊に対して、学士院恩賜賞が授けられた。五月二十七日東京美術学校講堂で受賞式が行われ、蘇峰の受賞の理由説明は文学博士三上参次が行った。学士院院長は男爵穂積陳重であった。

秀吉篇七冊のうちわけは、豊臣秀吉時代が三冊、朝鮮役が三冊、桃山時代概観が一冊という構成である。特に史料集めの徹底していたことは学者の認めるところである。朝鮮役に関しては、従前の書籍は勿論、日本側資料、中国、朝鮮方面の資料、そして自分で朝鮮役の年代間の年譜を作製し、それが二冊の厚いノートになったという。『朝鮮役上』の序文で蘇峰自身が「信を以て信を伝へ、疑を以て疑を伝ふは史家の徳義」と言い、朝鮮役を書くときには筆を投じたくなつたという。それは朝鮮役の時の秀吉が、山崎合戦の時の秀吉でなく、誇大妄想狂者、成功中毒の患者であつたからであるという。「若し平心にして朝鮮役の始中終を通観せん乎。我が日本国民は恐らくは未だ此の如き痛絶凱絶緊絶の教訓に接するもの無かるべし。此の朝鮮役は、平和に於ても、戦争に於ても、日本国民の性格を赤裸々に暴露している。特に其の日本国民性の大なる欠陥を暴露している」といい、戦争に巧みにして外交に拙なるわが国民の性癖を反省しよう、近世日本国民史普及版の月報にも、国民の猛省すべき大訓戒として載せている。そして此の外交の顛末は百代の龜鑑（てほん）であると書いている。蘇峰は秀吉が好きであるが、彼の毫末までを賛美するは、史家の任務ではないとしている。蘇峰は「私はあまり偉く人を見ない。偉い奴だと思つても終始偉くあるのぢやなく、或る瞬間に偉いことはある」（昭和二年三月「芸芸春秋」の座談会 菊池寛、山本有三、芥川龍之介出席）と言っている。

四、『近世日本国民史』と比較される書籍

・『大日本史』徳川光圀の撰。神武天皇から後小松天皇までの歴史。南朝を正統とした。徳川（水戸）光圀が一六五七年史局をもうけ着手し、生

涯これに尽くす。光圀没後も続けられ一九〇六（明治39）年完成。約二百五十年かかる。

・『日本外史』頼山陽著。史書。二十二卷。源平二氏の時代から徳川氏に至る武家の興亡を記して、史論を挿んだもの。一八二九年刊。約二十年かかる。

・『藩翰譜』新井白石著。諸藩の年譜。一六〇〇年―一八〇年のおよそ八十年間の大名三三七家の沿革などを集録。一七〇二年に成る。約一年かかる。

・『資治通鑑』司馬温公。周の威烈王から五代の終わりまで一三六二年間の歴代君臣の事跡を編纂した書。約十九年かかる。

五、蘇峰にとつての『近世日本国民史』

（『近世日本国民史』第百巻の述懐）より）

「記者（蘇峰）が『近世日本国民史』を著述するのは、新聞人としての内職でもなければ余業でもない。記者は、現代の新聞記者たるばかりでなく、併せて過去の新聞記者たらんことを期したるものである。所謂る過去を以て現在を觀、現在を以て過去を觀る。歴史は昨日の新聞であり、新聞は明日の歴史である。従つて新聞記者は歴史家たるべく、歴史家は新聞記者たるべしとするものである。仮りに新井白石や頼山陽をして今日の新聞記者たらしむるも、彼等は必ず第一流の記者たるを辱しめないであらう。予は決して歴史家の領分に足を踏み込まんとするものではない。歴史そのものもまた新聞人の領分と、初めから信じているものである」と、一生を新聞人として、歴史家として終始した自然さを語っている。蘇峰は五十六才から『近世日本国民史』を書きはじめたが、実は、二十四才で『将来之日本』を書いた青年蘇峰から続いている、蘇峰生涯をかけた著述であることがわかる。そして国民史の資料が充実されていることは定評があるが、蘇峰の蔵書（「成實堂文庫」）の総てが蘇峰に咀嚼され、国民史の資料になつてることが感じられる。

六、近世日本国民史の完成

昭和二十七年四月二十日百巻の稿を終わる。

『近世日本国民史』完成祝賀会が昭和二十八年六月五日、日比谷公会堂で行われた。蘇峰の講演に先立ち、塩崎彦市が完成するまでの由来を述べた。わかりやすく話されているので、全文を『晩晴』から転載する(12頁)。

七、『近世日本国民史』全百巻を時事通信社から出版

昭和三十八年六月出版。戦後十八年が経過していた。

広告の推薦文

1 昭和三十八年、時事通信社から出版された蘇峰徳富猪一郎著・文学博士平泉澄校訂『近世日本国民史』の予約募集の広告が『朝日新聞』に掲載された。全百巻で七万円であった。一面全部をしめた大きな広告(朝日新聞 昭和38年6月6日付)には蘇峰の笑顔の写真と平泉澄・小泉信三・安倍能成の推薦文がある。

平泉澄「本書は明治の最も偉大なる人物、西郷と大久保とをその初期に於て失う悲劇を以て幕をとじた。著者の目には涙があり、筆には火があつた。筆はその火の為に燃えつくしてそれ以後を書くに及ばなかつた。校訂に當つて、私は感慨の余り夜も眠りの安からぬ事しばしばであつた。小泉信三「『近世日本国民史』を私は毎巻欠かさずに読む。その魅力は著者蘇峰が人物といふものに興味を持ち、人物をよく知り、よく描くにあると思ふ。人物なくして歴史はないことを、読者はこれにより改めて痛感するであらう」。

安倍能成「蘇峰氏が五十六才から九十才に至る三十五年を傾けて百巻の『近世日本国民史』を完了されたことは驚嘆すべき大業である。今の私は最も多く歴史殊に我々自身の近代日本史に関心を持つ。本書を読み本書に学びたい」。

2 昭和四十四年一月十三日の『毎日新聞』に『近世日本国民史』が重版され、全百巻が十万円と広告された。文芸春秋社の社長 池島信平は次の

様に推薦。「徳富蘇峰氏の『近世日本国民史』は、わたしの最も愛読した史書の一つである。少なくとも戦国時代と明治維新のところは、精読したと思つてゐる。日本の歴史を通じて、最も興味深いのは、戦国時代と、明治維新だから、云つてみれば、日本史の一番うまいところを、蘇峰氏の料理で、堪能したというわけである。このことは、今でもわたしの精神形成の上で大きく影響されている。人間の見方、時代を歴史的に把握するということは、どうゆうことを学んだ。最近歴史ブームで、史書は書店の店頭に氾濫している。しかし、蘇峰氏のように、独力、百数十巻にわたつて自己の史観を展開し、貴重な古記録のエッセンスを、原文のままその書物の中に取り入れるといったやり方をした学者はいない。この本は、いまでも生きてゐる。わたくしは、歴史愛好家のみならず、この本をおすすめする。どこから読んでも面白い書物である」。

展示品の説明

一、『近世日本国民史』の「修史目録」貴重無二 徳富蘇峰直筆

第一巻 大正七年六月一日から大正十四年十二月二十八日

第二巻 大正十四年十二月二十九日から昭和八年十一月二十五日

第三巻 昭和八年十一月二十五日夕から昭和十二年八月三十一日

「修史目録」は蘇峰が近世日本国民史の構想を練つていた場であつたことが窺える。それにだんだんと日記的な書き込みが多くなり、頁の上部に国民史の項目を書き、その下に細かい字で日記を書くようになったようである。自分の喜びも悲しみもこの中にある。「貴重無二」のものであるとある。厚さ五センチの厚いノートで、茶色の紙でカバーされている。

ペン書きであるが、ところどころに社会的なことや、家族に大きな出来事が起きたときに書いたのであろう、生の感情を太字で墨書している箇所が見られる。

一冊を何年にも亘って使用されていたので、これ以上の手沢本はなからう。昭和十二年八月以降の三冊は徳富敬太郎氏が所蔵されている。

【解 釈】

*机の上にほこりがたまっているが、新しい書物(『近世日本国民史』)がある

*功名も馬鹿にしないし、仙術も学ばない

*残念なのは、歴史編集の事業はまだ終わらない

*険しいところも、夷(たいら)などところも安らかに進み、悠然としている

*先人の事業を受け継いで大成するのは後来の賢者に期待しよう

不没功妙不学仙
險夷安歩意悠然

功妙を没せず 仙を学ばず
險夷安歩して 意悠然たり

憂長白髪三千丈

憂いは長し白髪三千丈

論定丹心五百年

論は定まる丹心五百年

門外艸深無俗客

門外艸深くして俗客なく

安前埃積有新篇

安前埃積りて 新篇あり

独憐修史未終業

独り憐れむ修史の業未だ終わらざるを

紹述大成期後賢

紹述の大成は後賢に期す

蘇叟八十八

三、安政二年(一八五五)米国人来朝の図 絵巻二軸 彩色

ペリー来航時に同行した絵師が描いたもの。ペリー提督乗船のハストムコレカツト(三五〇人乗り)とシントノフィール軍将乗船のシツフライ(二五〇人乗)。ペリーの肖像。アメリカ兵が洗濯をしたり、下田の町を徘徊し、女郎屋で遊んだり、買い物したりしている図。絵師が中国人であったのかもしれないが、人物が東洋的な姿に描かれている。名前の記されている人物をあげてみると、アハタムス軍官、ペリリ提督、日本通詞マトウ、北亜墨利加人、黒坊、支那人、清人張師孔、清人羅森、繪図ヒンテンデアル、アメリカ下官、広東の産羅森。百四十年前の下田での日本人と米国人との出会いが平和なタッチで描かれていて楽しい絵巻。

四、西郷隆盛の外套

外套毛皮裏付黒色。鹿兒島博物館に出品された時の証明書付。それによると「西郷南洲翁の着用されしものにして、明治十年西南戦争中、南洲翁より辺見十郎大氏に給はりしもの」となっている。この外套を蘇峰が友人茂木育造より贈られ、それを塩崎彦市に昭和二十九年十一月に恵与した。蘇峰の添書に、「辺見家旧蔵にして、曾て鹿兒島博物館に出品したるものと承候。其の製造も明治十年以前のものに相違なく、老生も之を着用し岡田紅葉君によりて撮影せられたる因縁有之るものに付、貴邸に御保存被下候はば小生本懐不過之と存申上候」とある。二宮で蘇峰を囲む親睦会を催した返礼に恵与されたもの。西郷の外套は意外に小さい。

五、勝海舟の書 掛け軸 蘇峰への病氣見舞 明治二十四年

年々億万慮、総是盲想。放下其盲。以精神措其足心。是氣血循環之清涼法也。辛卯晚秋 海舟禪師

「国事を憂いて血が頭に昇っているから、頭の熱を踵まで下げればよくなるにそういない」と蘇峰を励ました。自分を禪師などと書き、ユーモアのある勝の一面が窺われる。蘇峰は勝に人間学を学び、生涯の師と仰いだ。

六、蘇峰漢詩 七言絶句 昭和十五年

堂々錦旗庄閔東 百万死生談笑中

群小不知天下計 千秋相对両英雄

昭和庚辰十月二十四日岳麓双宜荘に於て、時に冷雨相蕭条庭前の紅葉点滴に和して窓を撲つ。老蘇七十八

堂々たる錦旗閔東を圧す、百万の死生談笑の中、群小は知らず天下の計 千秋相对す両英雄

両英雄とは西郷隆盛と勝海舟のことである。徳川慶喜の幕臣勝海舟は、王政復古後、朝廷側と幕府側の平和的談判に心をもちいた。そして旧幕府軍を恭順に導き、西郷と協議し無血の状態で江戸城を明け渡した人物である。この両英雄の偉業を、福沢諭吉は明治二十五年「瘦我慢の説」という文章で非難した。それは「未だ一戦をも試みず、官軍に降伏し、江戸城を明渡したるは、兵乱の爲めに人を殺し、財を散ずるの禍を軽くしたりと雖も、瘦我慢の土風を傷ふの責は免かる可らず、(中略)敵は則ち敵なり。国家将来萬一の変に際して、勝氏の例を学び、国家を解散するものあらば如何勝氏の罪大なりと謂ふ可し」と、福沢は勝を武士の風上にも置けないと非難し、明治の時代になお「国家の功臣を以て、傲然自から居るが如きは、氏の爲めに深く悲しまざるを得ず」と言った。これに対し勝は「貴君には貴君の意見があり、私には私の信念がある。各々信ずる処を行うまでだ」と返書した。勝の死後、明治三十四年、福沢諭吉と蘇峰が『時事新報』と『国民新聞』を舞台に「瘦我慢の説論争」を戦わせた。海舟と西郷の行動を深く理解していた蘇峰は論吉に駁論した。西郷と勝の偉業に感激し感謝して『近世日本国民史』を書いたからこそ、西郷の外套が鹿兒島から蘇峰のもとに贈られたのであろう。この漢詩はいまも詩吟でよく吟じられている。

七、浮世絵 軸物

歌川(安藤)広重 (1797-1858) 「水郷堤花見図」

葛飾 北斎 (1760-1849) 「四季山水」フェノロサ鑑定

宮川 長春 (1683-1752) 「大道芸」

奥村 政信 (1686-1764) 「元禄美人風俗画」お能拝見

図「土佐女あつまりの図」

八、世界図

司馬 江漢 (1738-1818) 江戸後期の洋風画家・蘭学者

大作

九、泥繪

淡島橋 岳 (1823-1889) 幕末明治の画家「行事十二ヵ月」二軸 彩色

十、修史資料

蘇峰旧蔵の国民史の膨大な資料は、現在お茶の水図書館に保存、整理されている。当館の一階の常設展示場には、蘇峰が最後まで使用した人名・地名の辞典類や『海舟全集』などがある。特別展に展示したものは、一階に修史資料として展示されていたものと、昨年春に当館で出版した『徳富蘇峰宛書簡目録』の整理の過程で目についたものである。全体的に見て何等系統だったものではないが、並べてみた。

1 冊子

* 浪華書肆「銅板和漢年契」慶応二丙寅年新鐫

* 福沢諭吉『西洋事情』慶応四年

* 太政官「政体」慶応四年印刷 昭和十四年十月三十日 国民史資料

トシテ使用ス 老蘇七十七

* 「贈正五位三好監物 太政官仰渡書目録及年譜」係 三好秀真 明治三年二月 勤政庁

* 「佐賀賊徒巨魁人相御達」明治第八十二号 明治七年三月十七日

大阪府権知事渡辺昇「征韓党 佐賀県士族 江藤新平右人相一、年齢四十一才一、丈高ク肉肥タル方一、顔面長頬骨高キ方一、眉濃ク

長キ方一、眼太ク毗長キ方一、額広キ方一、鼻常体一、口並体一、

色浅黒キ方一、右頬ニ黒子アリ一、言舌太ク高キ方一、其他常体」。

この他石井竹之助、山中一郎、中島鼎蔵、朝倉弾蔵、香月経五郎、

山田平蔵、徳久幸次郎の人相書きあり。蘇峰識語「是書実罕購珍籍

也 明治史好資料 猪」

* 「伊達政宗 欧南遣使考」明治九年十二月平井希昌史館本局に於て

誌す

* 西村兼文「鹿児島征討日記」第四 明治十年三月

* 「熊本県諸物産、戸数反別、輸出入人員調査表」明治十六年十月

熊本県物産取調委員総代 倉園又三

* 鈴木大編輯「明治前期」博聞社蔵版 明治十八年一月

* 三好清徳「三好監物忠節録 全」仙台寧寥館蔵 明治十九年二月「珍

書須愛護 蘇峰七十六翁

* 「加賀藩勤王始末」野口之布述 志士敬賛会 明治二十四年十一月

* 松浦厚編輯「松浦法印征韓日記抄」松浦家蔵版 吉川半七發行 明

治二十七年十一月

* 栗田寛「天朝正学」明治二十九年十二月十五日 国光社

* 「題東西年表」井上頼国 大概如電 明治三十一年二月二十五日

発行者 吉川半七 赤エンピツ線あり

* 羽倉則 用九輯「紀元通略」明治四十二年十二月 蘇峰の書き込み

有り。容斎の印有り、おそらくは菊池容斎の手澤ならん。珍重す可

し。

* 「講演速記録 第参輯」維新史料編纂会明治四十五年四月

* 小池定雄「明治天皇仰景画録付録」国民新聞社 民友社 大正元年

十月

* 勝海舟先生初稿「城山没落」西郷南洲先生五十年祭典記念 大正十

五年九月 清和会 直筆複写

* 「THE JAPAN ADVERTISER」昭和五年六月十五日付 1854年

ペリーは再来日し、横浜に於いて日米和親条約が結ばれた。これに

より江戸幕府の根本的政策である鎖国は破られた。当時の様子を表

した1854年6月13日付「NEW YORK DAIRY TIMES」の筆写

記事が見つかり復刻された。条約締結時の様子やペリーの部下のキ

リスト教にのつとった葬儀の模様など興味深い記事が掲載されてい

る。また同じ紙面には中国における太平天国の乱に関する記事も見

2 筆写による史料

* 「萬延・文久幕末見聞録」 故中嶋忠左右衛門手記 男宙地編 四百字詰原稿用紙に筆で八十二枚

* 「文久・元治幕末見聞録」 四百字詰原稿用紙百十六枚 筆写の字の間違いを朱でなおしてある。

* 「安政年間英艦長崎訪問記事」 一八五五年一月二七日 ロンドンニユースより 野紙八枚 英文

* 江草進編 「志士松林織り之助と慶応四年英国公使容撃事件」 二月三十日

* 蘇峰自記「談話筆記」 明治二十六年五月 「曾我子爵の談話ならむ。此の謄写は議會開設前と思ふ 一読 明治四十二年九月十九日」と書き込みあり。「維新後軍制の沿革概略」「下士取扱法(養成法)」の題目あり。国民新聞社の野紙二十三枚

* 「岩倉相公筆蹟十通」 明治四十三年八月 山本復一 山本は岩倉具視公の秘書明治四年岩倉公に随て欧米に赴き、伊藤、木戸、大久保公等と一行に加はる。病を以て先だつて帰る 白鶴美術館の野紙に筆写

* 「大久保一翁建白稿」 丑九月 大久保右近将監

3 パンフレット

* 蘇峰徳富猪一郎著 「近世日本国民史 上製式拾冊」 国民新聞新築落成記念祝賀 特価・予約募集 民友社 大正一五年

* 蘇峰徳富猪一郎著 「近世日本国民史普及版」 五十巻の内容解説 昭和九年七月 明治書院

* 「月報」 昭和九年十月から十一年十月まで、近世日本国民史普及版五十巻が明治書院から刊行された。「月報」第一号に蘇峰の「人間学としての歴史」。二号には永井龍太郎の「大衆史家としての蘇峰先生」、木村毅の「無比の国民読本 普及版『近世日本国民史』」。

二号には馬場恒吾の「国民的自己反省と蘇峰翁の『近世日本国民史』」。五号には「著者から贈呈する記念品引替券」の雛形。蘇峰の「歴史家ならざるものの歴史の興味」があり、歴史は万人の共通の学、歴史は予想に反する実証を教えると述べている。六号には野間清治の「偉大なる教化力」。十八号には蘇峰の「政治家としての西郷南洲先生」。当館所蔵の「月報」は1から8までと、11、13、18、19、21の13冊。

* 徳富蘇峰先生講演 「維新史ニ於ケル会津」 昭和十二年十月 会津蘇峰会(非売品) 三十四頁

* 蘇峰徳富猪一郎著 「近世日本国民史大衆版 明治天皇宇史 法度制定篇上」 昭和十九年明治節 毎日新聞社刊 見本 七十一頁 珍しいもの

* 蘇峰徳富猪一郎著 「国史より観たる皇室」 昭和二十一年三月 昭和四十三年再版 新日本春秋社

* 蘇峰徳富猪一郎講演 「日本国史より見たる日本の姿」 近世日本国民史完成記念講演会記録 昭和二十八年十一月 電通内 蘇峰先生国民史完成記念会

4 慶応四年前後の新聞

* 「バタビア新聞」 萬屋兵四郎 文久二年正月 創刊号

* 「海外新聞別集」(下巻) 萬屋兵四郎 文久二年十月

* 「江湖新聞」 福地櫻痴 慶応四年閏四月三日 創刊号

* 「中外新聞」 柳河春蔵 慶応四年二月二十四日 外編

* 「遠近新聞」 慶応四年閏四月十日 創刊号 定価一匁

* 「日々新聞」 慶応四年閏四月十八日 創刊号

* 「公私雑報」 慶応四年閏四月七日 第三号

* 「新聞雑誌」 明治四年五月 創刊号

十一、三田村鳶魚（1870-1952）の協力

江戸、元禄の考証家で考証に独自の風格を示したといわれる鳶魚、本名玄龍の書簡が二十六通ある。

そのなかの十八通が大正十二年の五月から十二月にかけてのもので、いずれも長文で書留で送られている。蘇峰の質問に答える形で書かれ、「柳澤吉里は落胤なりや否や」「網吉が六百人の従者の馳走に一日三千金を使うをわからず、自身の儉約だけを維持するは、將軍様らしく、特に網吉を善くみせる」「能好きは男色に由来」「油屋のはなし」など、面白い話が沢山書かれている。また「元禄改鑄により外商引合に相来たらず、流出防止の効が有った事を白石が全く言及しないのは不思議、この辺のことは、外国の資料による方明白、先生の得意の所」などと書いているが、『三田村鳶魚全集』の日記によると、蘇峰のことを次のように評している。「懇なる中に村気あり、大体滑なる人物なり。鎖国までの処は自分の弱点なり、洋学もしたれば海外の材料を持ちたりなどは随分の村気なり」。元禄以後のところを調査未了であるので助力せよといわれたと言う。

蘇峰との初対面は大正十二年四月二十一日であることが日記からわかる。最初秘書の並木仙太郎が玄龍を訪ねている。蘇峰は早急に返事を求めていたようで、六カ月の調査が必要だと言うと、並木が「社長は性急なれば七日か十日の間にせられたしと言う」とある。蘇峰と面談したら「元禄時代を一冊にて書かんは惜しければ予定を変じて二冊としたりとか。此方より多少とも調査を加へて、答案したしといふに、それ迄の御手数はなくとも、只相應の刺激だに受くれば十分なりといふ、此人の心事見るが如し」とある。「江戸の各論を立てて着実、正確なるべきことに、鳶魚一代の心情がかかっていた」（池内紀）といわれる江戸の専門家鳶魚と、『近世日本国民史』の中の一部として元禄時代を書くという蘇峰との応答が面白い。

内田魯庵より三十年後に西鶴の面白さを理解したと語っている蘇峰は鳶魚から「相應の刺激」を受けて、楽しんで元禄時代を学びながら書いたようである。歴史はそれぞれの時代にそれぞれの専門家が在るなかで、三百年の修史を書くことは大変な勉強が必要であつたらうことが、鳶魚の書簡

によつても窺うことができる。蘇峰はこの時期、元禄時代政治篇、世相篇を書いていた。

『近世日本国民史』読者の反響

一、お礼と賛辞

細川護久は惠贈を喜び（S11・9）。

井上通泰「新椿山荘にても過日来二回迄貴著の御嚙承り申し候」（T7・12）有朋と話題にしていたことを伝えている。

山県有朋「貫紙国民史日々一読日々面白く覚候。実に文章活発意志明確一読不能惜候」（T8・1）。

古谷久綱「今夕は一章又一章通読又通読何時までも殆んど巻を掩ふ能はず、暫くの時間を割愛して茲に謹んで御礼申し上げます」（T7・12）。

清浦奎吾「近世日本国民史なる経世一大事業を完成せしめらるる為めには、十分健康を養ひつつ心血を瀧がれ度は祈。毎朝国民新聞紙を展べ国民史を読むは一大興味に候。国民新聞壱万号記念として国民教育奨励金募集は至極美挙と賞賛候。細川侯爵家寄付金壱万金位奮発あり度と存じ候へ共来年度予算算非常の膨張に付結局五千円より上ることは六ヶ敷かと存じ候。小生は貧者の一灯として百円寄付仕候」（T8・11）。

浜尾新「近世日本国民史織田氏時代前編1冊 皇太子殿下へ献上した」（T7・12）。

梅田又次郎「大日本国民史関ヶ原役所謂天授人力ではありません。何卒後世の為御自愛專一に祈り上げます」（T11・8）。

田中義成「老生兼て如此史乗の世に出でんことを希望致し居り候所、幸いにも先生の靈筆によりて発現せるは誠に邦家のため慶すべき事と奉存候」（T8・1）。

与謝野寛・晶子「歴史を文学よりも好み候妻は、少き時間をぬすみ候ては、必ず御高著を通読し、それを小生にも話して聞かせ、多大の御教と興味とを兩人が受けをり候」(T12・7)。

留岡幸助「恩賜賞誠にめでとう。先生の御名譽たるにとどまらず未輩たる小生まで名譽を拝受しよう」(T12・6)。

鶴見祐輔「日本国民史は小生渡米中肌身離さず携帯致し日本の事情紹介の據典として重宝仕り候」(T15・3)。

高田元三郎「夕刊廃止に伴ひ紙面縮小の余儀なきに至り誠に申し兼ね候へ共国民史の毎日掲載量を多少縮減して頂かねばならぬこととなり 新聞の前述も誠に心細きこちにて戦局重大の折り柄心痛致しおり候」(S19・3)。

相馬黒光「去る五日は雨中にもかかわらず予定時間以上に亘る御講演を拝聴いたし此上ともない感激を覚えました。御身にも終始お疲れを見ずむしろ終りに近づくに従い音吐朗々壯者を凌ぎ御元氣なお姿を仰ぎ歡喜のあまり涙さえこぼれました。聴衆も生氣と希望をとりもどしたこととぞんじます。然し不思議にも納得のできないことは場内を見渡して殆ど青年男女の姿が老の眼に入らなかつた事でございます」(S28・6)。

中山優「誠に以て恐らくは空前の盛事と感激不禁」(S28・6)。

二、内容についての感想

大浦兼武「貫紙織田、徳川の幕拝読真に愉快、流石に昔の政治家其意志鉄石の如く唯々感嘆の外無之。今時流行朝野薄志弱行の政治家に感ぜしめ度、山々に御座候」(T7・8)。

人見一太郎「日本外史は応急手当の薬石にして己に其用を為し了れり。近世日本国民史は世間を利益すべく雨の如く普潤し日光の如く普照せん。不朽の名著たる点に於いては慥かに日本外史の比にあらざるなり」(T10・10)。

石橋忍月「先生の近世日本国民史に対し帝国学士院より恩賜賞あり、謹みて祝意申述候。素より先生数十年來の文壇に於ける威勲は江湖の認知する処にして恩賜賞の有無によりて先生を軽重するに足らずと雖も、先生の

絶倫なる努力が学士院をして終に先生の価値を公認せしむる迄に民衆化せしむるに至りしは一入慶喜の念に堪えざる次第に御座候」(T12・6)。

福田徳三「国民史の進行は、実に嬉しいことです。此と国民紙上の御小品とは、私は一読を欠きません。略 将来の日本其以来私共が進んできた度合よりも先生の進歩の方が、遙かに先きなのは、負け嫌ひの私も、とてもかなはぬと思つています」「何時拝読しても趣味津々として尽きず、小生の切望する所は、誰か実文に巧なる人根氣よく此書の概説なりとも実文にて刊行する人の起らんことは是也。百の宣伝便に勝ること疑なし。然し今の世に其篤篤志家ありや否や小生不幸之を知らず。しかし一度は必ずためされねばならぬことを信じて疑はず」(S2・6)。

朝河貫一「日本文学史の誇りとすべきは申すまでもなく、又史学並びに経世の道に貢献する所多大と存じ候。此一大著のみを以てしても御一生は人生と天とに対して勤められたる勲功は常人の上に遙かに超えられ候事」(S4・12)。

吉屋信子「私は江島が単に淫婦のみならざるやう祈つて材料を集めて見ましたが歴史小説は身に着かぬ芸と存じ目下は手をつけませむ」(S5・5)。

久布白落実「近世史第一巻誠に小説より面白く仰せの如く文字紙上に立つの思ひでした」(S9・11)。

丸山幹治「明治時代は国史の精髓なるに從來中学校や小学校にては学期の終りに教めるため時間乏しく大概尻切蜻蛉となる実状にて一般の貧しき国史知識は明治以後殊に甚しきもの有之、東日大毎は新聞として必ずしも満足に組せざるも、近世日本国民史のみにて如何なる紙の統制強化となるともその存在理由を失はざるを確信し、大いに心強く存じ居り候」(S18・2)。

深井英五「先年貴名の漏れたるとき憤慨と謂ふべき気分を生じ候へども先生の存在が忘却されたりとは思はず、只詮衡標準の何にあるかを不可解としたる次第に候。御修史は未完成なりと雖も之を理由とする亦不可ならず。尚それよりも明治、大正、昭和の三代に亘る国民の思潮に寄与せられたることの大なるを以て論議の余地なき理由とすべき筈と存じ候」(T18・5)。

馬場恒吾「今日国民史七十六巻終りの処を拝読、大村益次郎が敵軍将帥の

人物を洞察、居ながらにして敵を破り得たる項を見て、今日の戦争に際してかうした明家達観の大将が居たらと思はざるを得ず」(S18・8)。

三、史料の提供の申し出

近衛文麿は蘇峰の修史の計画を知り、「編纂上の材料等当家に御入用のものは何なりと提供可致候。決してケチ臭き事は不申す候間御遠慮なく仰せ下され度、些たりとも御役に相立ち候へば誠に本懐之至りに御座候」(T6・5)と申出。

山川健次郎『正書公政教要録』と申す書別封にて貴ご覧に呈し候。老台修史の御参考として敬上呉れ候様、具称山義岡の人々の希望につき如此御座候」(T12・12)。

三上参次「並木氏を以て御示しの楽翁公花月日記の抜き書きして御送り申上候。ゆるゆる御使用可被下候。先般の光吉氏的一条遺憾千万の次第」(T15・1)。

石川武美は終戦の年の九月に「成實堂文庫の御本は一冊も失ことなきを得ました。どうぞおよろこびください」(S20・9)。

四、内容から受けた恩恵

高群逸枝『女性の歴史』が出来た御笑覧下さい。国民史からいろいろ引用させて頂きまして、ありがたう存じ上げます。(引用の箇所は索引にございます) (S30・6)。

森田草平「小生はともかく近世日本国民史七十巻を通読して、先生から教へを受けること最も深きもの一人でございます。織田豊臣時代の如きは先生が信長も秀吉もすつかり御自分のものにして書いていられる所にあると存じます。これが私も自分で先生の跡を追うて見て初めて腹から分かりました。史料の研究の進歩は二十年前と今日とは非常の差だと承ります。あの時代にしてあれを書かれた先生は、やはり在来の史家の持つていないものを持つていられる方であつたとつくづく感じてをります」(S16・8)。

山川健次郎「昨日の夕刊に於て十九士伝に御同情ある御紹介被下忝存じ

候。十九士伝忠死の事実少しにても多く世に伝り候はば、世道人心に益する所有之候間、勢力ある国民新聞に於て賢兄の御執筆の御紹介は大なる反響有之候事と深く欣喜する所に御座候」(S2・4)。

白柳秀湖「先生はまことに小生再生の恩人にて、小生がヂャアナリズムよりネグレクトされることに付、直接小生へ御話あり、又間接人を介して御高配の有り難きを承知いたし居り、ひそかに感涙に咽んで居ました。略石の上の松を懸命になつて保護して下すつたものは先生一人、小生史学の負ふところは、三宅先生より半分、徳富先生の近世日本国民史より半分といふところ、実正なるも岩の上の松を保護して下すつたものは先生ただ御一人あるのみとぞんじます」(S13・12)。

小説家もジャーナリストも政治家も評論家も、『近世日本国民史』を身近に感じて愛読していたことが、これらの書簡から伝わってくる。

『近世日本国民史』が完結 するまでの由来

塩崎彦市

近世日本国民史が、大正七年以来三十五年の間統稿せられ、いかなる経路を辿って完成をみたるかについて一言申上げ、御参考に供したいと存じます。先生が修史を思い立たれたことは、新聞記者たることを思い立たれた時代と、殆んど同時代でありまして、先生は明治十年西南役の時は、京都同志社にあつたのであります。当時、明治天皇をはじめ、明治政府の重臣は、木戸、大久保、以下殆んど皆京都にあり、京都はまさに政治及び軍事の中心点でありました。その時から、先生は一生のうちに維新の歴史を書いて見たいという志を起され、爾来機会ある毎に、維新の故老について親しくそのことに関する談話をきき、かつこれを銘記して他日の用に供することを忘れられなかつたのであります。

先生は、当時から官軍、賊軍というような建前で書かれた維新史には不満でありました。

先生は、薩長土肥の藩閥にも生れず、また会桑および東北諸藩にも生れず、熊本の郷土に生れました。熊本藩は維新の大活劇には藩論一定せざるため立おくれ、このため国民的大動揺、大活動の場面を公平な立場で書くことを期せられたのであります。然るに、自ら筆をとって維新を書くなどということには暇がなく、漸くその小手調べと申しましようか、明治二十六年に吉田松陰なる一書を世に出し、当時の読書人をして狂喜発奮せしめたことは御承知の通りであります。そして、大正の初めにおいて先生は粉々擾々たる政界より足を抜き、いよいよ修史の業にとりかからんと志し、二、

三の同志と語り、修史局を開き着手致しました。大正三年五月先生の修史のことに最も期待せられ、その完成をみるまではと督励せられておりました。厳父淇水先生が逝去せられました。日頃非常に孝養深き先生は、その大なる衝撃のために史筆を一時投ぜられましたが、しかし更に「大正の青年と帝国の前途」なる一書を著述せられ、これも第二の小手調べともいべきものであります。

かくて漸く時来りて、大正七年五月よりあらためて筆をおとりになったのであります。

この時において先生は、第一は友人の助力をかりず、一人にてこの事業を成し遂げんことを決心せられました。第二には、直ちに維新史に向わず、維新大事業のよって来る淵源より叙せんとして「近世日本国民史」と題し、織田氏より筆を起すことを決心せられたのであります。実は建武中興より起さんことを期せられたのであります。先生既に五十歳を過ぎておいでで日暮れて道遠き感をお考えになり、織田氏より始めることになったのであります。先生は織田時代をもつて、我国近世の劈頭と信ぜられたばかりでなく、信長その人に対して大なる関心をもつていられたからだと思います。

先生の厳父淇水先生は、横井小楠門下の第一人者であり、その令弟三人も、もとより母堂の令妹は小楠夫人であり、またその他の姉妹も、殆んど小楠門下の家に嫁せられ、徳富御一統は殆んど横井実学の巢窟といつても差支なきものであります。従つて厳父淇水先生は熊本藩にあつて、常に時事について奔走せられておられ、其の史料なども家庭においても、相当得る所のものも少くなかつたのであります。

修史の史料について挙げますれば、限りなきほどであります。個人としては勝海舟翁であり、翁の如きは幕府側は勿論、あらゆる方面に関する史料を与えられたのであります。

薩摩方面においては大山元帥、松方海東、重野安繹、小牧昌業、長州側においては伊藤、井上、山県それに吉田松陰先生の義兄弟である揖取素彦、村田清風の後なる村田峰次郎、長州史家の中原邦平その他島津家、毛利家

の編集所各位、また土佐においては板垣退助、田中光顕、佐賀方面に於ては大隈重信侯、特に会津においては先生の恩師なる新島襄先生夫人八重子女史が籠城者として最も勇敢に行動し誉れをのこしたる人なれば、其の語る所について得る所が少くなかったのであります。全体について申上ぐれば、最も感謝すべきは水戸徳川氏であつて、最も貴重なる史料を寛大に使用することを許されたことであります。更に特筆することは、東京帝国大学史料編集所であり、更に三上(参次)、田中(義成)、市村(讚次郎)、辻(善之助)、渡辺(世祐)の諸先生であります。只今では辻、渡辺両先生の御健在のみで感慨無量なるものがあります。

また、岩倉公、細川、前田両侯爵、織田、水野両子爵、柳沢伯爵家、尾張徳川家、越前松平家、清浦伯其の他諸藩に亘りますが省略いたします。なお、李王家、内閣文庫、頭山翁、佐々、高田、宗像、川崎三郎の諸氏よりも得るところが少くなかったのであります。そして本書の編集には草野茂松、並木仙太郎の両氏が最初あづかりしましたが、大正九年四月以来、今日に至るまでは高橋源一郎氏が専らこれに任ぜられたのであります。さらに、昭和四年四月以来、本山彦一翁の好意により、国民史が東京、大阪の毎日新聞に掲載せらるるにおよんで、同社の大友喜作氏が先生の原稿を謄写し、かつこれを校正せられたのであります。またこれを出版するには明治書院の森下松衛、三樹退三の両氏に負うところ多く、其の他逐一挙ぐれば限らないのであります。

特に一言申上げたいことは、先生の令夫人静子刀自の内助の大なる功であります。刀自は、先生が毎朝午前五時より、春夏秋冬を問わず起き出でて筆をおとりになる、旅行中でも同じでありましたが、刀自は自ら午前四時または三時より起きて、その準備をせられ、先生が床を蹴つて起れば直ちに筆をとつてお仕事のできるようにして、万遺憾なきを期せられたのであります。三十有五年、一日の如く御尽しになった静子刀自の、今日この席に御同列なきは、まことに残念にございますが、必ずや誠実なる刀自の靈魂はこの会場に御照覧なつておることと信ずるものであります。

なお先生には、日本全国の史蹟はもとより朝鮮の如きは、当時の朝鮮総督の好意によつて、適當なる案内者を得て、御夫妻にてあらゆる方面を視察せられたのであります。かくの如く、内外の諸地方において便宜を与え

下されたるに對し、今猶感謝せられていたのであります。国民史の全部は百冊であり、その回数をあぐれば実に一万一千七百八十一回であります。一日一回といえますれば、三十三年二ヵ月かかるのであります。原稿用紙にして二十三万六千枚、その字数にいたしますれば二千七百三万字にも達する尨大無比なるものであります。その内二百七十三回は終戦後一年四ヵ月を要して先生の口述を藤谷みさを女史によつて筆記せられたのであります。現在出版せられたものは七十六冊であり、余りの二十四冊分は原稿のまま、先生の手許にある次第であります。即ち、七十七冊明治政務篇から、第百冊明治時代までが原稿のままありますが、本年よりは七十七冊明治政務篇の出版に取りかかるべく只今準備中でございます。

以上極めて簡単ながら、御参考に供する次第であります。本日は雨天のところ斯の如く多数御光臨を頂きまして老先生の胸中察するに余りあるものがございます。謹みて御礼申し上げます。

(蘇峰記念館主)

※昭和二十八年六月五日、『近世日本国民史』完成祝賀会が日比谷公会堂で行われた時の講演の筆録。

『近世日本国民史』 起稿・脱稿・発行年月日一覽

民友社版
 第1巻～61巻（大正7年12月1日～昭和14年2月20日）
 時事通信社版
 第62巻～100巻（昭和35年9月10日～昭和38年2月10日）
 全100巻

講談社学術文庫版（現在も継続して）
 発行

通巻 番号	標 題	起稿 年令	起 稿	脱 稿	発 行	登 場 人 物 数	通巻 番号	標 題	発 行
15	徳川幕府上期中巻・統制篇	〃	T 11・12・4	T 12・2・16	T 13・11・20	320人	37	徳川幕府統制篇	S 58・1・10
14	徳川幕府上期上巻・鎖国篇	〃	T 11・9・25	T 11・11・30	T 13・10・15	184人	36	徳川幕府鎖国篇	S 57・12・10
13	家康時代下巻・家康時代概観	〃	T 11・5・30	T 11・8・14	T 12・12・5	338人	32	徳川家康3	S 57・1・10
12	家康時代中巻・大阪役	60	T 11・2・20	T 11・4・22	T 12・5・7	340人	28	徳川家康2	S 56・10・10
11	家康時代上巻・関原役	〃	T 10・11・29	T 11・2・18	T 12・1・1	467人	27	徳川家康1	S 56・9・10
10	豊臣氏時代庚篇・桃山時代概観	〃	T 10・8・8	T 10・11・28	T 11・9・15	402人	30	豊臣秀吉4	S 56・11・10
9	豊臣氏時代己篇・朝鮮役下巻	59	T 10・2・25	T 10・7・15	T 11・5・20	487人			
8	豊臣氏時代戊篇・朝鮮役中巻	〃	T 9・12・7	T 10・2・24	T 11・1・15	387人			
7	豊臣氏時代丁篇・朝鮮役上巻	58	T 9・9・1	T 9・12・6	T 10・5・5	525人			
6	豊臣氏時代丙篇	〃	T 8・10・6	T 8・12・23	T 10・6・10	632人	29	豊臣秀吉3	S 56・10・10
5	豊臣氏時代乙篇	〃	T 8・6・6	T 8・10・5	T 9・12・28	624人	26	豊臣秀吉2	S 56・9・10
4	豊臣氏時代甲篇	57	T 8・1・1	T 8・6・5	T 9・3・15	429人	25	豊臣秀吉1	S 56・8・10
3	織田氏時代後篇	〃	T 7・10・10	T 7・12・27	T 8・10・15	583人	18	織田信長3	S 56・1・10
2	織田氏時代中篇	〃	T 7・8・13	T 7・10・9	T 8・6・20	519人	17	織田信長2	S 55・12・10
1	織田氏時代前篇	56	T 7・6・3	T 7・8・12	T 7・12・1	565人	16	織田信長1	S 55・11・10

38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
朝幕交渉篇	安政条約締結篇	朝幕背離緒篇	公武合体篇	孝明天皇初期世相篇	日露英蘭条約締結篇	神奈川条約締結篇	彼理来航及其當時	彼理来航以前の形勢	幕府実力失墜時代	天保改革篇	文政天保時代	雄藩篇	幕府分解接近時代	松平定信時代	田沼時代	宝曆明和篇	吉宗時代	元禄享保中間時代	元禄時代下卷・世相篇	元禄時代中卷・義士篇	元禄時代上卷・政治篇	徳川幕府上期下卷・思想篇
68	〃	〃	67	〃	66	〃	〃	65	〃	〃	64	〃	〃	〃	63	〃	〃	62	〃	〃	〃	61
S 5・1・30	S 4・11・9	S 4・8・2	S 4・1・9	S 3・9・1	S 3・4・21	S 2・12・8	S 2・7・18	S 2・3・23	T 15・12・10	T 15・8・10	T 15・4・16	T 14・12・29	T 14・9・22	T 14・6・5	T 14・2・14	T 13・11・4	T 13・7・7	T 13・3・29	T 12・12・16	T 12・8・17	T 12・5・18	T 12・2・23
S 5・5・5	S 5・1・29	S 4・11・8	S 4・8・1	S 4・1・8	S 3・8・31	S 3・4・20	S 2・12・7	S 2・7・17	S 2・3・22	T 15・12・4	T 15・8・9	T 15・4・15	T 14・12・28	T 14・9・21	T 14・6・4	T 14・2・13	T 13・11・3	T 13・7・6	T 13・3・28	T 12・12・3	T 12・8・1	T 12・5・15
S 6・12・15	S 6・8・20	S 6・3・20	S 5・11・21	S 5・8・18	S 5・4・19	S 4・12・19	S 4・9・1	S 4・1・20	S 3・9・25	S 3・6・20	S 3・3・10	S 2・11・23	S 2・9・10	S 2・5・28	S 2・1・10	T 15・9・15	T 15・6・5	T 15・2・17	T 14・11・18	T 14・9・5	T 14・6・15	T 14・4・20
274人	76人	111人	117人	253人	76人	95人	108人	209人	159人	136人	197人	200人	150人	202人	176人	165人	261人	152人	193人	247人	357人	335人
23	22	21	20	19	4	3	2	1						40	39		35		33	31	34	38
堀田正睦 5	堀田正睦 4	堀田正睦 3	堀田正睦 2	堀田正睦 1	開国日本 4	開国日本 3	開国日本 2	開国日本 1						松平定信時代	田沼時代		徳川吉宗		元禄時代世相篇	赤穂義士	元禄時代政治篇	徳川幕府思想篇
S 56・3・10	S 56・3・10	S 56・2・10	S 56・2・10	S 56・2・10	S 54・6・10	S 54・5・10	S 54・4・10	S 54・3・10						S 58・8・10	S 58・7・10		S 57・10・10		S 57・7・10	S 56・12・10	S 57・8・10	S 58・2・10

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	通巻 番号	標 題
長州再征篇	倒幕勢力擡頭篇	幕府瓦解期に入る	幕長交戦	長州征伐	内外交渉篇	筑波山一挙の始末	元治甲子禁門の役	文久元治の時局	大和及生野義拳	攘夷実行篇	尊皇攘夷篇	文久大勢一変下篇	文久大勢一変中篇	文久大勢一変上篇	久世安藤執政時代	開国初期篇	桜田事変	安政大獄後篇	安政大獄中篇	安政大獄前篇	井伊直弼執政時代		
74	〃	〃	73	〃	〃	〃	〃	72	〃	〃	〃	71	〃	〃	70	〃	〃	69	〃	〃	68	年令 起稿	
S 10・11・2	S 10・8・9	S 10・5・21	S 10・2・7	S 9・12・11	S 9・9・15	S 9・7・8	S 9・4・14	S 9・2・8	S 8・11・25	S 8・8・17	S 8・5・3	S 8・1・15	S 7・9・21	S 7・6・19	S 7・1・10	S 6・10・3	S 6・6・24	S 6・2・21	S 5・12・18	S 5・8・16	S 5・5・6		起 稿
S 11・1・20	S 10・11・1	S 10・8・8	S 10・5・20	S 10・2・6	S 9・12・10	S 9・9・14	S 9・7・7	S 9・4・13	S 9・2・7	S 8・11・24	S 8・8・16	S 8・5・2	S 8・1・14	S 7・9・20	S 7・6・18	S 7・1・9	S 6・10・2	S 6・6・22	S 6・2・20	S 5・12・17	S 5・8・15		脱 稿
S 13・11・10	S 13・7・15	S 13・4・25	S 12・12・25	S 12・9・30	S 12・6・25	S 12・4・30	S 11・12・15	S 11・8・10	S 11・5・3	S 10・10・27	S 10・7・17	S 10・4・15	S 9・11・30	S 9・7・30	S 9・4・1	S 8・12・10	S 8・8・15	S 8・4・15	S 7・11・25	S 7・7・25	S 7・4・20		発 行
153人	146人	102人	162人	149人	95人	177人	222人	161人	212人	167人	244人	201人	157人	220人	131人	108人	222人	234人	133人	197人	223人		登 場 人 物 数
													49	48	47	46	45	44	43	42	41	通巻 番号	
													維新への胎動(中) 寺田屋事件 生麦事件	維新への胎動(上) 寺田屋事件	和宮御降嫁	遣米使節と露英対決篇	桜田事変	安政の大獄後篇	安政の大獄中篇	安政の大獄前篇	井伊直弼		標 題
													H 6・3・10	H 5・10・10	H 4・7・10	H 3・11・10	S 59・3・10	S 59・1・10	S 58・12・10	S 58・11・10	S 58・10・10		発 行

83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61
廃藩置県後形勢篇	廃藩置県篇	内政統制篇	薩長内政篇	法度制定篇	新政扶植篇	明治政務篇	函館戦争篇	奥羽平定篇	北越戦争篇	会津籠城篇	奥羽戦争篇	奥羽和戦篇	関東征戦篇	新政内外篇	官軍東下篇	官軍東軍交戦篇	皇政一新篇	皇政復古篇	大政返上篇	新政曙光篇	孝明天皇崩御後の形勢	孝明天皇御宇終篇
〃	〃	〃	78	〃	〃	77	〃	〃	〃	〃	76	〃	〃	〃	〃	〃	75	〃	〃	〃	〃	74
S 15・6・25	S 15・4・29	S 15・3・9	S 15・1・19	S 14・10・30	S 14・4・14	S 14・2・5	S 13・12・5	S 13・8・31	S 13・4・13	S 13・7・4	S 13・2・20	S 12・12・30	S 12・10・9	S 12・8・10	S 12・6・10	S 12・3・26	S 12・1・31	S 11・12・1	S 11・9・29	S 11・8・6	S 11・5・10	S 11・1・21
S 15・9・21	S 15・6・24	S 15・4・27	S 15・3・8	S 15・1・18	S 14・10・29	S 14・4・13	S 14・2・4	S 13・12・4	S 13・7・3	S 13・8・19	S 13・4・12	S 13・2・19	S 12・12・29	S 12・10・8	S 12・8・9	S 12・6・9	S 12・3・25	S 12・1・20	S 11・11・30	S 11・9・28	S 11・8・5	S 11・5・9
S 36・3・10	S 36・2・10	S 36・1・10	S 35・12・10	S 35・11・10	S 35・10・10	S 35・9・10	S 38・9・10	S 38・9・10	S 38・8・10	S 38・8・10	S 38・7・10	S 38・7・10	S 38・6・10	S 38・6・10	S 38・5・10	S 38・3・10	S 38・4・10	S 38・4・10	S 38・3・10	S 38・3・10	S 38・2・10	S 14・2・20
146人	120人	110人	88人	163人	143人	125人	118人	186人	125人	126人	156人	145人	152人	201人	237人	212人	201人	175人	266人	164人	115人	220人
																		8	7	6	5	
																		明治維新と江戸幕府4	明治維新と江戸幕府3	明治維新と江戸幕府2	明治維新と江戸幕府1	
																		S 54・11・10	S 54・10・10	S 54・9・10	S 54・8・10	

通巻 番号	標 題	起稿 年令	起稿	脱稿	発行	登場 人物数	通巻 番号	標 題	発行
84	内政外交篇	78	S 15・9・22	S 15・12・15	S 36・4・10	134人			
85	欧米と東洋篇	〃	S 15・12・16	S 16・2・15	S 36・5・10	93人			
86	征韓論前篇	79	S 16・2・16	S 16・10・15	S 36・6・10	125人			
87	征韓論後篇	〃	S 16・10・16	S 17・1・23	S 36・7・10	78人			
88	征韓論分裂以後篇	80	S 17・1・24	S 17・5・21	S 36・8・10	120人			
89	佐賀の乱篇	〃	S 17・5・22	S 18・4・9	S 36・9・10	118人			
90	台湾役始末篇	81	S 18・4・10	S 18・7・31	S 36・10・10	99人			
91	大阪会議の前後篇	〃	S 18・8・1	S 18・11・20	S 37・3・10	132人			
92	外交雑事篇	〃	S 18・11・21	S 19・3・6	S 36・12・10	118人			
93	萩秋月等の事変篇	82	S 19・3・8	S 19・6・29	S 37・1・10	126人	9	西南の役 1	S 55・2・10
94	神風連の事変篇	〃	S 19・7・2	S 19・10・13	S 37・2・10	189人	10	西南の役 2	S 55・3・10
95	西南役緒篇	〃	S 19・10・14	S 20・2・13	S 37・3・10	95人	11	西南の役 3	S 55・4・10
96	西南役出師篇	83	S 20・2・14	S 20・6・4	S 37・4・10	136人	12	西南の役 4	S 55・5・10
97	熊本城攻守篇	〃	S 20・6・5	S 20・9・13	S 37・5・10	98人	13	西南の役 5	S 55・7・10
98	西南役両面戦闘篇	83 89	S 20・9・13	S 26・5・27	S 37・6・10	137人	14	西南の役 6	S 55・9・10
99	西南役終局篇	89	S 26・5・28	S 26・11・10	S 37・1・10	120人	15	西南の役 7	S 55・10・10
100	明治時代	89 90	S 26・11・11	S 27・4・20	S 37・8・10	207人	24	明治三傑	S 56・5・10

※『近世日本国民史』起稿・脱稿は、杉原志啓氏の「蘇峰と『近世日本国民史』」(都市出版)付録による。

※講談社学術文庫版については、徳富敬太郎氏にご教示いただいた。

※登場のべ人数は約2万6百人を数えるが、重複した人物を一割と考え、約1万8千人と推察した。

徳富蘇峰記念館

〔入館ご案内〕

〔開館日〕 月・水・金曜日

*特別休館日／年末・年始及び8月の第3・4週

尚、2月(梅の時期)は土・日曜日も開館致しております。

〔開館時間〕 午前10時～午後4時

(ご入館は3時半までに願います)

*観覧料 大人 500円 学生 200円

編集後記

この十年来、書簡を中心に特別展を企画してきたが、今回は『近世日本国民史』という、蘇峰の生涯をかけた百冊の修史を中心に展示した。近世日本国民史に親しみを持った展示になったのではないかと思う。民友社から出版された上製本の巻頭にある挿し絵は、展示映えのするもので、歴史への興味をそそる絵巻となっている。職員一同、挿し絵の説明書を作りながら多くのことを学び、近世日本の歩みを肌で感じることができた。そして私どもがいかに近世を勉強していなかったか反省を込めながら、近世ほど面白い時代はないと感じた。

昨年春『徳富蘇峰宛書簡目録』を出版し、史料整理に一段落がついた。現在書類の整理に職員一同(高野、和田、宮崎、塩崎)で励んでいる。記念館は目録出版後、史料閲覧希望者が増え、史料が研究に使用されてきた手応えを感じている。史料の複写は有料であるが、規定を設けたので、必要な方は申し込んでいただきたい。ここで一言お礼申し上げたい事は、昨年書簡目録を初期に申し込んで戴いた方には、当館の不慣れのために、いろいろお手数をおかけし、御協力して戴いたことである。読書人は良い方ばかりで、理事長の望み通り、総て落丁本は回収できたことを御報告させていただく。(ここの)

平成八年二月十五日 発行

編集 高野 静子

発行者 竹越 起一

発行所 徳富蘇峰記念館

〒289-01 神奈川県中郡二宮町二宮六〇五
TEL 〇四六三二七二〇二六六

『徳富蘇峰宛書簡目録』

財団法人 徳富蘇峰記念塩崎財団編

蘇峰宛の約四万六千余の書簡を全て差出人名、社名別に収録した目録。差出人は一万一千余人を数える。明治・大正・昭和のオピニオンリーダーをはじめ、政治家から文学者と広い分野の人々との交遊の様子を書簡が伝えている。蘇峰という一人の人物が一万一千余人からの書簡を受けている事実と、その人々の職業の多様なことに驚かされる。各界の著名人はもとより、多数の市井の人々や冒険家、暗殺者、諜報員、世にいう奇人変人、成功者、脱落者と、さながら人生の縮図を見るようである。『書簡目録』は人名辞典のようなものであるが、人間に興味のある方々に見ていただきたい。全てが蘇峰宛であるということ一つ一つの物語になる。

尚、在庫が百冊ほどございます。ご希望の方はお申し込み下さいませ。早速にお送り致します。

発行 1995年3月28日

発行者 竹越 起一

編集 財団法人 徳富蘇峰記念塩崎財団

発行所 徳富蘇峰記念館

〒259-01 神奈川県中郡二宮町二宮605番地

Tel.0463-71-0266

(頒布価) 10,000円 学生 8,000円

徳富蘇峰関係の単行本

- 伊藤 隆・酒田正敏・坂野潤治 他編 『徳富蘇峰関係文書』(近代日本史料選書7-1-1)——山川出版社 昭和57年
- 酒田正敏・坂野潤治 他編 『徳富蘇峰関係文書』(近代日本史料選書7-1-2)——山川出版社 昭和60年
- 酒田正敏・坂野潤治 他編 『徳富蘇峰関係文書』(近代日本史料選書7-1-3)——山川出版社 昭和62年
- 徳富蘇峰記念塩崎財団編／高野静子解説 『徳富蘇峰記念館所蔵 民友社関係資料集』(民友社思想文学叢書・別巻)——三一書房 昭和60年
- 和田 守・有山輝雄 編 『徳富蘇峰・民友社関係資料集』(民友社思想文学叢書・第一巻)——三一書房 昭和61年
- 花立三郎 『徳富蘇峰と大江義塾』——ペリかん社 昭和54年
- 花立三郎 『大江義塾』——ペリかん社 昭和57年
- 平林 一・山田博光 『民友社文学の研究』——三一書房 昭和60年
- お茶の水図書館編 『成實堂文庫洋書目録』——(財)石川文化事業財団 お茶の水図書館 昭和61年
- 高野静子 『蘇峰とその時代』——中央公論社 昭和63年
- 〔リン・シン〕訳 TOKUTOMI SOHO『The Future Japan』——カナダ・アルバータ大学 平成元年
- 坂野潤治 『大系日本の歴史13 近代日本の出発』——小学館 平成元年
- 和田 守 『近代日本と徳富蘇峰』——お茶の水図書館 平成2年
- 藤井賢三 『昔男ありけり——徳富蘇峰・筆戦一代記』——下関プリント 平成3年
- 有山輝雄 『徳富蘇峰と国民新聞』——吉川弘文館 平成4年
- 平林 一・山田博光 編 『民友社文学・作品論集成』——三一書房 平成4年
- ビン・シン 著／杉原志啓 訳 『評伝 徳富蘇峰』——岩波書店 平成5年
- 井上 弘 『近代文学成立過程の研究——柳北・学海・東海散士・蘇峰』——有朋堂 平成7年
- 杉原志啓 『蘇峰と「近世日本国民史」』——都市出版 平成7年
- 中村青史 『民友社の文学』——三一書房 平成7年

昭和54年以降出版された蘇峰関係の単行本を、紹介致しました。